

# 文化概念を再考する

## — 文化経済学、文化心理学、文化人類学の対話を通して —

原 知章\*

### I はじめに

2008年1月26日に、「文化概念の再構想」という公開シンポジウムが早稲田大学で開催された。このシンポジウムは、早稲田大学文化人類学会が主催したものであり、「文化」という概念をめぐるディスカッションを軸として、文化経済学、文化心理学、そして文化人類学の対話の場を切り開こうとするものであった<sup>1)</sup>。デイヴィッド・スロスピーは経済学の学派の間にみられる「文化」の違いに言及しているが（スロスピー，2002，p.28）、文化経済学、文化心理学、文化人類学の間には、経済学における学派の間に見られるよりも一層大きな「文化」の違いを見いだすことができるといえよう。このような分野間の「文化」の違いをふまえた上で、文化経済学、文化心理学、文化人類学という「文化」を冠した3つの分野の対話の場を切り開き、さらには「文化」という概念の再構想を試みることに、このシンポジウムのねらいがあった。

管見のかぎりでは、このような文化経済学と文化人類学の対話の場が日本においてこれまで設けられることは、ほとんどなかった。さらに、ここに文化心理学も加わって、文化概念に関するディスカッションを行なうのは、日本でおそらく初めての試みであったといえてよい。本稿では、このシンポジウムの企画者として、「文化概念の再構想」を掲げた学際的なシンポジウムを企画するに至った背景を、主に1980年代以降の文化人類学における文化概念をめぐる議論を参照しながら論じる<sup>2)</sup>。

本題に入る前に、「文化人類学」という分野の名称について補足的な説明をしておきたい。読者諸氏のなかには、文化人類学以外に「民族学」や「社会人類学」という分野の名称を聞いたことがある方がおられるに違いない。これら文化人類学、民族学、社会人類学という分野が相互にどのような関係にあるのか疑問を抱いたことがある方もおられることだろう。もともとこの分野が19世紀後半にはじめて制度化されたヨーロッパにおいては、「民族学」や「社会人類学」という名称が用いられてきたの

に対し、文化相対主義をはじめて唱えたフランツ・ボアズとその弟子たちによって、ヨーロッパよりもやや遅れてアメリカ合州国において制度化されたのが「文化人類学」であった<sup>3)</sup>。日本では、ヨーロッパとアメリカの双方から研究の蓄積を受容してきたが、日本最大の関連学会の名称が2004年に「日本民族学会」から「日本文化人類学会」へと変更されたことに象徴されるように、今日では、「文化人類学」が、この分野の名称として最もよく用いられるようになっている。

アメリカ流の文化人類学は、文化概念を中心にすえて、ヨーロッパの民族学・社会人類学とは異なる独自の歴史を歩んできた（cf. 竹沢，2007a）。一方、ヨーロッパの民族学・社会人類学においては、たとえば、かつてイギリスの社会人類学を牽引したアルフレッド・ラドクリフ＝ブラウンが、文化概念の曖昧さを批判し、社会構造を中心にすえて研究を進めるべきことを主張したことから窺えるように、文化概念が中核的な概念としての位置づけを与えられてきたわけでは必ずしもなかった（ラドクリフ＝ブラウン，2002，pp.262-263；cf. Sahlins，1999）<sup>4)</sup>。

本稿で焦点を当てる文化概念をめぐる再検討の動きは、主に1980年代以降、アメリカの文化人類学者の間で活発化し、その後、日本でも議論されるようになった経緯がある。以下、本稿で「文化人類学」という場合、特に断りのない限り、アメリカと日本における文化人類学を念頭においたものと考えていただきたい。

### II 「文化」の実体化と文化相対主義

文化概念は、長らく文化人類学の中核的な概念として位置づけられてきた（Yengoyan，1986）。いうまでもなく、この場合の文化概念とは、「人間生活における知的・道徳的・芸術的側面をともなっていて行われる人々の活動や、その活動が生み出す生産物」と定義される狭義の文化概念ではなく、「ある集団に共有される態度や信念、慣習、習慣、価値観、風習など」をふくむ広義の文化概念を指している（スロスピー，2002，p.23）。

文化人類学が制度化された学問分野として発展していく過程で、この広義の文化概念には多様な定義が与えら

\* 静岡大学人文学部准教授

E-mail : jthara@ipc.shizuoka.ac.jp

れてきた。1950年代初頭に、文化概念の定義を包括的に調査し、その検討を行なったアルフレッド・クローバーとクライド・クラックホーンは、160以上の文化の定義を挙げている(Kroeber and Kluckhohn, 1952)。このように文化概念が多様化し、拡散するなかで、「信念、慣習、習慣、価値観、風習」などを網羅的に挙げる定義や「生活様式の総体」といった茫漠とした定義にとどまらず、文化を「象徴と意味の体系」、あるいは「社会のなかで共有された知識の体系」と捉えて、文化概念を精緻化する試みもなされてきた(cf. Keesing, 1974)。ただしこうした試みにおいても、文化が、研究者の主観や認識を離れて存在する客観的な実体としてしばしば仮定されていた点では、それ以前の文化概念と同根であったといえる。

「文化＝客観的な実体」という仮定は、その定義の如何を問わず、“culture”という単語が可算名詞として扱われ、“a culture”や“cultures”という形でしばしば用いられてきたことから窺える。実際には、文化とは、客観的な実体ではなく、現実を抽象化して得られた概念でしかない。それにも関わらず、しばしば文化が実体化されてしまうことに対して、ロジャー・キージンは注意を喚起している。すなわち、学問世界でも一般社会においても、“culture”はしばしば可算名詞として用いられ、「日本文化は協調性を重んじる」、「私たちは日本文化に属している」といった言説が流布しているが、こうした言説においては、抽象概念でしかない文化が、あたかも外界に存在するモノであるかのように見なされてしまっているというのである(Keesing and Strathern, 1998, p.20; cf. Wolf, 1982)。

可算名詞としての“culture”をアメリカの文化人類学において最初に用い、その後、このような用法が学界で定着するうえで最も影響力をもったのは、ボアズであった(Stocking, 1982, p.203; cf. Kuper, 1994)<sup>5)</sup>。ボアズにとって、文化を実体化した上で、その複数性を把握しようとするのは、彼が唱えた文化相対主義と相即不離の関係にあったといえよう。つまり、「個々の文化は独自の価値観やものの見方を有している」という主張を核とする文化相対主義にとって、「地球上には、相互に明確に区別できる複数の文化が並存している」ということは前提的な命題となっていたのであり、このような前提から出発して、独自の価値観やものの見方を有する「個々の文化」を包括的かつ詳細に調査・研究することが、文化人類学のプロジェクトとして立ち上げられたのである。

あらためてここで確認しておくならば、相互に明確に区別できる「実体としての文化」を対象とするこのようなアメリカ流の文化人類学のプロジェクトが、ヨーロッ

パにおいて必ずしも受け入れられていたわけではなかったことは、イギリスを代表する社会人類学者のエドモンド・リーチが、次のように述べていることから想像できるだろう。

私には〔「複数の社会」という概念に比べると〕複数の文化という概念の方がずっと理解しがたいものである。ティコピア文化とかタレンシ文化という語が何を意味しようとしているかについては私は理解できるが、地図上の異なる場所におけるそうした文化(文明)の表われが、そこに住む人口がまったく釣り合いのとれないものであるという事実にもかかわらず、互いになんとか比較できるような分離されたものとして区別できるということが、私にはわからないのである。……それだから用心していただきたい。文化について複数形で書いたり、ある社会の文化が一枚一枚、他と区別できる衣類の特定の組み合わせであるかのように書く人類学者に出会ったら、気をつけることです(リーチ, 1991, pp.49-51)。

話をもとに戻せば、ボアズが唱えた文化相対主義は、「各々の文化は独自の価値を有している」という主張にとどまるものではなかった。ボアズが強調したのは、私たちのものの見方もまた文化的に構築されたものであって、私たちはいわば「文化メガネ」をかけて、他文化を把握し、理解しようとしているのだという認識であり、したがって自文化を反省的に見つめなおすことの重要性であった(Boaz, 1974; cf. 太田, 2003, pp.53-85; 竹沢, 2007a, p.217)。

このようなボアズの自省的な姿勢は、文化相対主義のきわめて重要な側面であったが(cf. 浜本, 1996)、その後、彼の弟子たちによって必ずしも継承されたわけではなかった(竹沢, 2007a, pp.221-238)。ただし総じていえば、「文化＝客観的な実体」という仮定にもとづいた文化相対主義の主張は、ボアズ以後の文化人類学はもとより、一般社会にも多大な影響を与えてきたといえよう。ボアズが唱えた文化相対主義は、人間社会の多様性を、「人種」の多様性に由来するものとして捉えるのではなく、また「文明／未開」のように序列化された垂直的な関係によって捉えるのではなく、水平的な関係にある諸文化の多様性として把握しようとし、その後、様々な批判にさらされつつも(cf. ブルーム, 1988; Devereux, 1967; Edgerton, 1992; Spiro, 1986)、今日の「多文化主義」や「多文化共生」の理念につながる思想史的水脈を形成したのである<sup>6)</sup>。

ところで、文化人類学は多様な下位分野を抱えている

が、そのなかでも経済人類学や心理人類学は、多くの蓄積を有しており、確立された下位分野として一定の地位を占めている。しかしそれにも関わらず、これまで文化人類学と、経済学や心理学の対話が必ずしも十分ではなかったとするならば、その理由のひとつは、文化人類学が、しばしば上記のような人間の文化的多様性に対する前提的な認識から出発していた点に求めることができるだろう<sup>7)</sup>。

裏を返せば、これまで主流となってきた経済学では、「ホモ・エコノミクス」の概念に象徴されるように、ある種の普遍的な人間像を前提として経済活動を分析しようとしてきたのであり、このことは主流の心理学に関しても同様であった。心理学においても、「ホモ・サイコロジクス (homo psychologicus)」と称することができるような普遍的な人間像が前提とされてきたのである<sup>8)</sup>。この点について、キャサリン・クーパーとジル・デナーは次のように述べている。「心理学者たちは、特定のサンプルをこえた一般化を行ない続けている。彼らは、人間の心理現象は普遍的であるという前提のもと、自国の人びとのみを対象とした自らの研究が、人間の心理現象を十分代表するものだと考えている」(Cooper and Denner, 1998, p.579; cf. ニスベット, 2004)。

ここには、経済学や心理学と文化人類学の間大きな「文化」のギャップを認めることができるが、文化を鍵概念として掲げ、人間の文化的多様性を重視した文化経済学と文化心理学の登場は、このようなギャップを越えた学際的な対話の新たな可能性を切り開くものであったといえよう。しかし、文化経済学と文化心理学が興隆してきた時期に、文化人類学の側では、文化概念に対する批判的検討が進められるようになった。そしてこのような議論が展開されるなかで、文化人類学はもはや文化概念を廃棄すべきであるという主張が現われるようになったのである。

### III 文化概念廃棄論の登場

1980年代に、ドナルド・マクロスキー(1992)が、経済学の論文におけるレトリックや、そうしたレトリックをつうじた経済学的知識の構築のプロセスを論じた頃、文化人類学においても、従来の理論的パラダイムの正当性を根拠づけていたエスノグラフィー(民族誌)の記述の透明性や客観性という自明の前提が批判的に問い直されつつあった。エスノグラフィーは調査地における文化人類学者の観察や経験を直接的に反映しており、他文化の現実を客観的に「表象=代理 (represent)」しているという前提がゆらぎはじめ、エスノグラフィーが批判的に

再検討されるとともに、その新たな可能性が模索されるようになったのである。メタファーやレトリックといった「文学的作用」が、エスノグラフィーの作成過程に深い影響を及ぼしていることが論じられ(クリフォード・マーカス, 1996)、従来のエスノグラフィーにおいて描かれてきた固定的で均質な文化をもつ人びと—たとえば「バリ人」や「ヌエル族」など—は、言説的に構築された「ホモ・エスノグラフィクス (homo ethnographicus)」にすぎないと喝破された (Spencer, 1989)。また、イマニュエル・ウォーラーステインによる世界システム論や、カルチュラル・スタディーズなどの視座を援用した新たなエスノグラフィーの可能性が論じられるようになった(マーカス・フィッシャー, 1989)。

そして、このような一連の議論のなかで、「文化は科学の『対象』ではない。文化、そして『文化』に対する私たちの見解は歴史的に産出され、活発に競合している」といった認識が現われるようになった(クリフォード, 1996, p.33)。こうした文化に対する新たな認識は、ひとり文化人類学のみならず、カルチュラル・スタディーズやポストコロニアル批評といった1980年代に台頭してきたアプローチ、あるいは歴史学や社会学などの学問分野においても横断的に共有されていったものであり、このような認識から出発する文化分析や、既存の研究や学問分野の批判的再検討の興隆は「カルチュラル・ターン (cultural turn)」と呼ばれた (cf. 吉見, 2003)。

文化人類学においては、このようなカルチュラル・ターンの潮流の延長上に、文化概念を廃棄すべきであるという、よりラジカルな文化概念批判が現われるようになった。こうした文化概念廃棄論の代表的な論者であるライラ・アブールゴッドは、1991年に「文化に抗して書く」というタイトルの論文を発表して、大きな反響を呼んだ (Abu-Lughod, 1991)。アブールゴッドは、この論文のなかで、次のように主張した。文化概念は、「西洋=われわれ」と「非西洋=彼ら」の差異が、自然かつ生得的なものではないことを明確にした点で、たしかに有意義であった。しかし、とりわけ実体化された文化概念は、それをどのように定義したとしても、対象の均質性、非歴史性、一貫性を暗示する。このような文化概念に依拠してきた文化人類学の言説は、「西洋」と「非西洋」の差異を固定化し、結果として「西洋」と「非西洋」の間のヒエラルキーや不平等を強化する機能を果たしてきた。したがって、文化概念とは「他者を作り出すために不可欠な道具」であり、人種概念と同様に廃棄すべきだとアブールゴッドは主張したのである (Abu-Lughod, 1991, p.143; cf. Kahn, 1989)。

アブ＝ルゴッドの文化概念廃棄論は、彼女自身が「ハーフィー」<sup>9)</sup>やフェミニストとしての立場から文化人類学的研究を実践してきた経験を背景としており、また、エドワード・サイードによるオリエンタリズム批判に依拠したものであるが、その後、アブ＝ルゴッドとは異なる視角からも、文化概念廃棄論、もしくはそれに類似した議論が展開されている。たとえば日本においては、福島真人が、政治、経済、法などのサブシステムに機能分化をとげた高度に複雑な現代社会を記述・分析する上で、本来きわめて曖昧な概念である文化概念は役に立たないので、より厳密かつ有用なクラス・ルーマンの社会システム理論を導入しつつ、文化人類学が社会科学全体のなかで一定の役割を果たし、存続するための戦略を考えるべきだ、と論じている(福島, 1998)。

一方、このような文化概念廃棄論に対して、文化概念を擁護する論者もいる。クリストフ・ブルマンは、文化概念廃棄論が挙げる文化概念の問題点は、文化概念それ自体というよりも、その一部の用法にのみ妥当するものであって、集団間にみられる「後天的に学習された慣習」の多様性と、特定の集団の内部におけるそうした慣習の共通傾向を捉える上で、依然として有用であると論じた(Brumann, 1999)。

こうしたブルマンの文化概念擁護論に対して、アブ＝ルゴッドは、ブルマンが、一般社会において文化概念が政治的に用いられており、すでに「汚染」されている点を十分に考慮していないと批判したが(Abu-Lughod, 1999)、関本照夫は、このアブ＝ルゴッドの論点を先取りしつつ、さらに進めて、文化はそもそも政治的な概念であると主張している(関本, 1994, 1998)。文化とは、あらゆる指示対象と結びつきつつ、特定の集団の独自性や良き価値を主張するために用いられてきた本来的に政治的な概念である、というのだ。関本によれば、文化概念を用いて、様々な人間集団が、「われわれ」の独自性や良き価値を語ることは、近代世界に独自の普遍的制度である。そして、文化人類学もこのような近代の制度の一部を構成するものである以上、価値中立的な概念として文化を定義しようとしても、その試みは部分的にしか成功せず、客観的な立場から文化を記述・分析しようとしても、そうした文化の記述・分析は、一般社会に流通するなかで、様々な集団による文化をめぐる語りのポリティクスに絡めとられていく、というのである。

実際、マーシャル・サーリンズも指摘するように、「文化」という語を誰もが口にするようになったことは、少なくとも20世紀後半以降の現代世界における顕著な特徴であるといえよう(Sahlins, 1994)。ここでサーリンズは、植民

地主義・帝国主義体制下において「西洋」列強に支配されてきた「非西洋」の、いわゆるマイノリティの人びとの間で、文化的自意識が高まってきたことを念頭においており、このような動向を「カルチュラリズム(culturalism)」と呼んでいる。しかし最近では、文化概念は、マイノリティが文化的アイデンティティや文化的権利を主張するカルチュラリズムにおいてだけでなく、「西洋」のマジョリティの人びとがマイノリティを抑圧し、排斥する「文化的人種主義(cultural racism)」においても動員されるようになってきている(Stolcke, 1995; 竹沢, 2007b; Wright, 1998)。たとえば、フランスの極右政党の国民戦線は、文化相対主義を「流用」しながら、次のように移民排斥の主張を展開している。「あなたたち〔移民〕にはあなたたちの長い伝統や文化がある。私たちにもある。かなり違う。一緒に暮らすのは難しいし、無理に暮らして互いの文化を破壊し合うことになるのはよくない。文化を尊重し合うためには別々に暮らすのが一番だ」(朝日新聞1999年2月14日朝刊)。

このように、現代世界において様々な人間集団が「文化」をめぐる語りのポリティクスを展開しているのならば、それでは文化人類学者はこのような状況にどのように対峙すべきか、という問いが生じてくる。フランスの極右政党の文化的人種主義を批判することは、たやすい。しかし、それではマイノリティの人びとによるカルチュラリズムに対しては、どのように向き合うべきなのか。アブ＝ルゴッドは、文化概念に依拠したマイノリティの運動を「逆オリエンタリズム」に過ぎないと批判する(Abu-Lughod, 1991, p.144)。一方、フラン・マルコヴィッツは、アブ＝ルゴッドとは逆に、マイノリティの人びとにとってカルチュラリズムが「国際社会において、自らを肯定的に承認し、価値ある位置を占める上で、非常に重要な手段となっている」と指摘している(Markowitz, 2004, p.329)。また、「マイノリティ」の人びとは決して一枚岩ではなく、カルチュラリズムは「マイノリティ」のなかのナショナリストやエリートによるものであって、カルチュラリズムの主張のもとで抑圧されているサバルタンの存在に目を向けるべきだと論じる者もいる(Linnekin, 1992)。つまり、「誰が誰にむけてどのように文化を語っているのか」を見極める必要があるというわけである。

関本自身は、カルチュラリズムや文化的人種主義に対して何らかの価値判断を下すことなく、様々な人間集団によって文化という語がどのように使われてきたのかをあくまで客観的に観察しようとするスタンスをとっている。しかしその前提となっている「文化の語が指示しているはずの何ものかを追い求めるのは無益な作業」とい

う認識もまた（関本，1998，p.21）、文化をめぐる語りのポリティクスに絡めとられる可能性がある、という見方もできるだろう。また、「文化について語る」のではなく、「文化についての語りについて語る」ことに一定の意義があるとしても、文化人類学が追究してきた「人間の生の営みの多様性をどのように把握し、語るのか」という問題は、依然として残されたままであるといえよう。

#### IV 文化概念を媒介とした対話に向けて

以上に概観したように、近年の文化人類学においては、文化概念に対するラジカルな批判的検討が進められてきた。ここで確認しておくならば、こうした批判的検討は、ひとり文化概念のみに向けられたものではなかった。アプ＝ルゴッドの議論がそうであったように、そこでは「西洋」が「非西洋」を政治的、経済的、そして知的に支配し、収奪してきた近代世界の構造と、こうした近代世界の構造に深く埋め込まれてきた文化人類学の学問的営為がそれ自体が祖上に載せられたのであり<sup>10)</sup>、このような議論の射程のもとで、人びとの集合を相互排他的に分節し、人びとのアイデンティティを固定化していく支配のテクノロジーの一環として、文化概念が批判的に検討されたのである（cf. 松田，2001；小田，2006）。

このことを確認したうえで、あらためて文化概念をめぐる議論に焦点を当てるならば、一連の議論をつうじて、かつて「人種」を批判したように「文化」という概念も批判し、廃棄すべきだという立場に立つのか、逆に、文化概念は依然として有用だと擁護する立場に立つのか、それとも、一概には文化概念を批判したり擁護したりすることはできず、誰が誰にむけて文化を語っているのかを見極めるべきだという立場に立つのか、あるいは、現代世界において文化概念がどのように用いられているかを客観的に観察するという立場に立つのか、というように、現代の文化人類学者の文化概念に対するスタンスは分かれてきたといえる。

本稿の文脈において、筆者にとって重要に思えるのは、このような近年の文化人類学における文化概念をめぐる一連の議論が、一般社会のみならず、他の学問分野に対しても（一部をのぞいて）ほとんどインパクトを与えてこなかったように見える、という点である<sup>11)</sup>。関本は、研究者による文化の「客観的」な記述・分析が一般社会に還流していくなかで、文化をめぐる語りのポリティクスに絡めとられていく可能性を指摘した。しかし総じていえば、近年の文化人類学における文化概念をめぐる議論は、一般社会だけでなく、隣接諸分野においてすらあまり知られることのない、いわば「内輪」の議論にとどまっ

てきたように思えるのである。また、これらの議論は、しばしば文化概念や、あるいは文化人類学という学問分野の政治性を強調するあまりに、自らの言論を封じ込めてきたきらいがある。一般社会や他の学問分野で文化概念が多用され、文化をめぐる議論が活発化するなかで、文化人類学の内部で「文化概念を廃棄すべきだ」と唱えるだけでは、文化人類学と一般社会や他の分野との間の懸隔をますます広げ、文化人類学の議論を内閉化させることにつながりかねない。

一般社会に目を向ければ、先に見たようなカルチュラルリズムや文化的人種主義の展開以外にも、ユネスコや国連開発計画などを中心とした「文化（的）多様性」をめぐる国際社会の動向や、日本における「多文化共生」政策の本格化など、文化と、そして人間の多様性をめぐる議論は、ますます喧しくなっている。また、学問世界に目を向ければ、カルチュラル・ターンの潮流に最も強く反発した分野と評される経済学と心理学では（Bonnell and Hunt, 1999）、この間、文化経済学と文化心理学が、各々の分野における主流の学派の前提に対して大きな問題提起を行ないつつ興隆してきている<sup>12)</sup>。文化概念がアポリアに直面しているのだとしても、人間の文化的多様性を重視した文化経済学と文化心理学が興隆してきたことは、経済学と心理学にとってのみならず、人文社会科学全体にとって重要な意義をもつと考えられる。

文化概念は、これらの学問分野や一般社会と文化人類学の対話を切り開く回路として、依然として有用であるはずだ。すでに、文化経済学、文化心理学、文化人類学の各々の分野において個別に追究されている共通の問題もある。たとえば、スロスビーが挙げる「世界中の人々の間で財とサービス、メッセージとシンボル、そして情報と価値の流通が増大したことが、文化の多様性にどのような衝撃をもたらしたか」という問題はそのひとつである（スロスビー，2002，p.240）。心理学においても、「グローバルな人口構造や政治的・経済的な変化と移民の増大が、諸々のネーションの内部における文化の多様性と変化に対する学術的な関心……を新たに引き起こしている」という（Cooper and Denner, 1998, p.559）。

文化人類学においても、グローバリゼーションと文化的多様性をめぐる研究は活発に進められているが（cf. Inda and Rosaldo, 2007；Lewellen, 2002）、先に概観してきた文化概念の批判的検討をふまえるならば、こうした研究を進める上でも、もはや「文化」を客観的な実体としても自明の概念としてもみなすことはできず、近代以降、文化概念自体がグローバルに浸透するなかで、人びとを相互排他的にカテゴライズし、人びとのアイデ

ンティティを固定化するような支配のテクノロジーが作動してきた過程が、同時に問題化されなければならないということになる。ただし、このような議論をさらに進めていくと、先に見たように、文化人類学という学問分野自体もまた、「非西洋」を支配してきた「西洋」の一部を構成してきたのであり、したがって自らの学問的営為の政治性を問うべきだ、という議論に帰着する可能性がある。あるいは文化人類学だけでなく、文化経済学や文化心理学において用いられてきた文化概念や、これらの学問分野自体の政治性をさらに問うていくこともできよう。このように学問分野の政治性を問題化することには、一定の意義があるのかもしれない。しかし、こうした議論を進めるなかで、グローバリゼーションが深化する現代世界における人間の生の営みの多様性をどのように捉えるかという初発の問いは、しばしば置き去りにされてしまう。

文化概念を再考しつつも、人間の生の営みの多様性を追究する初発の問いを手放さず、内閉化していきがちな議論をより開かれたものへと転換し、既存の学問分野を越えた共通認識の構築を模索していくことが重要である。学際的な対話の場においては、しばしば相互の分野の批判に終始したり、あるいは各々の分野の前提が異なるために議論がかみあわないといった事態が見受けられる。しかし私たちはすでに、文化経済学、文化心理学、文化人類学の間「文化」の違いがあることを認識している。このように、学問分野の間に見られる様々な違いを捉える際に文化概念を媒介させることの意義は、各々の学問分野が、自らの「文化メガネ」に固執して内閉化していくためではなく、自らの「文化メガネ」を意識化した上で、新たな共通認識の構築へと向かい、「文化メガネ」の刷新へとつながるような対話を促す点にこそ求めることができるだろう<sup>13)</sup>。

## 謝辞

本稿を執筆する機会を与えてくださった後藤和子氏に、記して感謝申し上げます。

## 注

- 1) 本シンポジウムの概要については、本号に掲載されている内田真理子氏による報告を参照されたい。
- 2) 本シンポジウムを企画する上で、特に以下の文献から多くの示唆を得た(小田, 2006; 杉島, 2001; 竹沢, 2007a)。
- 3) 「民族学」という分野の名称はアメリカでも用いられてきた。ただし、アメリカにおける(そして、その他の国々でも)「民族学」という名称の指示対象やそ

の広がりや、一様ではない。たとえばジョージ・マードックは、『民族学 (*Ethnology*)』という雑誌の創刊に際して、「民族学とは、アメリカ人が文化人類学とよび、イギリス人が社会人類学とよぶ分野に含まれるあらゆる領域を含んでおり、また、アメリカ、イギリス、あるいはそれ以外の国の人類学者たちが民族学という名称で理解しているものすべてを含んでいる」と述べているが(Murdock, 1962)、これに対して、現代のアメリカでは、民族学は、通文化的な比較研究を行なう研究領域とされ、この民族学と、特定の文化に焦点を当てて詳細に記述し、考察を進めるエスノグラフィーによって文化人類学が構成されているとの位置づけが与えられることが多い(cf. Ferraro, 2001)。

- 4) ヨーロッパの民族学・社会人類学の歴史やその独自性については、以下の文献を参照されたい(cf. 船曳, 1998; リーチ, 1991; 竹沢, 2007a)。なお、『国立民族学博物館研究報告』31巻1号(2006)では、「世界の人類学」という特集が組まれており、アメリカ、フランス、イギリス、中国における人類学の研究・教育の現状と課題が論じられている。
- 5) 可算名詞としての“culture”の起源は、18世紀のヨハン・ヘルダーの用法にまで遡ると考えられる(ウィリアムズ, 2002, p.86)。一般社会および文化人類学における文化概念の歴史については、以下の文献を参照されたい(イーグルトン, 2006; Kroeber and Kluckhohn, 1952; Kuper, 1999; 西川, 1995, 2001; ウィリアムズ, 2002)。
- 6) なお、多文化主義が抱える諸問題に関する近年の文化人類学における議論については、以下の文献を参照されたい(戴, 1999; ターナー, 1998; 米山, 2003)。
- 7) このことは、文化人類学が、人間の文化的多様性のみならず、その共通性や普遍性を軽視してきたということの意味しない。
- 8) 「ホモ・サイコジクス」という語は、ニコラス・ハンフリーによって、個体間の社会的な相互作用をつうじて自意識や「心の理論」をもつに至った人間を指す語として用いられているが(Humphrey, 1984)、本稿では、ホモ・エコノミクスに比することができると、主流の心理学において想定されてきた普遍的人間像を指して、この語を用いている。
- 9) 「ハーフィー」とは、「移民や、海外で教育を受けた経験や、血筋から、複数のナショナルな、あるいは文化的なアイデンティティを有するようになった人びと」を指している(Abu-Lughod, 1991, p.137)。

- 10) このような「西洋」による「非西洋」の支配という図式に文化人類学を還元していく議論に対して、清水昭俊は、それが文化人類学を「西洋」特有のものとして領有する言説となっていると批判している（清水, 2001a）。世界の人類学の多様性や、そのなかで日本の人類学が占める位置、「西洋」の人類学と日本の人類学の関係については、以下の文献を参照されたい（清水, 2001a, 2001b; cf. 桑山, 1997）。
- 11) ただし、文化人類学者による特定の集団の「文化」の記述・分析に対して、対象となった人びとの側から批判の声があがり、論争へと発展したケースはいくつか知られている。たとえば、以下の文献を参照されたい（Linnekin, 1991a, 1991b）。なお、スロスビーは、スーザン・ライトによる文化概念の政治化をめぐる論文を参照しつつ、「文化プロセスの力学とそれらが意味する力関係」を、文化概念の精査すべき点として挙げている（スロスビー, 2002, pp.26-27; cf. Wright, 1998）。
- 12) ナイジェル・スリフトが指摘するように、カルチュラル・ターン以後の文化分析において経済的側面の分析が不十分であったことを考えるならば（Thrift, 1999）、文化経済学が興隆してきた意義はきわめて大きいと考える。
- 13) 文化人類学が、今後、文化経済学や文化心理学との生産的な対話を進めることができるかどうかという点に関していえば、たとえば、近年の文化心理学の大きな成果とされるリチャード・ニスベット（2004）の『木を見る西洋人 森を見る東洋人』に対して、どのように応答するのかということ、ひとつの試金石になるだろう。ニスベットは、様々な心理学的実験の結果を総合しつつ、東洋人の思考様式やものの見方が「包括的」であるのに対して、西洋人のそれは「分析的」であると結論づけている。このニスベットの著作に対して、アメリカを代表する文化人類学者であるシェリー・オートナーは、文化人類学において重視されてきた参与観察の手法を引き合いに出しつつ、「人びとを部屋に押し込めて奇妙な作業をさせることによって、彼らの文化について何か有意義なことを学ぶことができるという考え方は、私にはとても疑わしいものに思える」と述べている（Ortner, 2003）。さらにオートナーは、ニスベットの議論が、総じて実験の結果を「東洋人」と「西洋人」の差異に還元していることを厳しく批判し、こうした議論は「非生産的なステレオタイプ（あるいはそれ以上に悪いもの）」を助長する恐れがあると論

じている。ニスベットの著作に対するこのようなオートナーの批判は、文化心理学と文化人類学の間の生産的な対話を進めるよりも、むしろ対話を閉ざす方向へと導くものであるように思える。

#### 参考文献

- Abu-Lughod, Lila, "Writing Against Culture," in Fox, Richard G., (ed.) *Recapturing Anthropology: Working in the Present*, Santa Fe, School of American Research Press, pp.137-162, 1991.
- Abu-Lughod, Lila, "Comment," *Current Anthropology* 40 (supplement), pp.S13-S14, 1999.
- アラン・ブルーム『アメリカン・マインドの終焉—文化と教育の危機』菅野盾樹訳、みすず書房、1988年。  
(Bloom, Allan, *The Closing of the American Mind*, New York, Simon & Schuster, 1987.)
- Boas, Franz, "The History of Anthropology," in Stocking Jr., George W., (ed.) *A Franz Boaz Reader*, Chicago, The University of Chicago Press, pp.23-35, 1974 (1904).
- Bonnell, Victoria E., and Lynn Hunt, "Introduction," in Bonnell, Victoria E., and Lynn Hunt, (eds.) *Beyond the Cultural Turn: New Directions in the Study of Society and Culture*, Berkeley, California University Press, pp.1-32, 1999.
- Brumann, Christoph, "Writing for Culture: Why a Successful Concept Should not be Discarded," *Current Anthropology* 40 (supplement), pp.S1-S27, 1999.
- ジェームズ・クリフォード「序論—部分的真実」ジェームズ・クリフォード、ジョージ・E・マーカス（編）『文化を書く』春日直樹ほか訳、紀伊國屋書店、pp.1-50, 1996年。  
(Clifford, James, "Introduction: Partial Truths," in Clifford, James, and George E. Marcus, (eds.) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley, University of California Press, pp.1-29, 1986.)
- ジェームズ・クリフォード、ジョージ・E・マーカス（編）『文化を書く』春日直樹ほか訳、紀伊國屋書店、1996年。  
(Clifford, James, and George E. Marcus, (eds.) *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, Berkeley, University of California Press, 1986.)

- Cooper, Catherine R., and Jill Denner, "Theories Linking Culture and Psychology: Universal and Community-Specific Processes," *Annual Review of Psychology* 49, pp.559-584, 1998.
- Devereux, George, *From Anxiety to Method in the Behavioral Sciences*, The Hague, Mouton, 1967.  
テリー・イーグルトン『文化とは何か』大橋洋一訳, 松柏社, 2006年.  
(Eagleton, Terry, *The Idea of Culture*, Oxford, Blackwell Publishers, 2000.)
- Edgerton, Robert, *Sick Societies: Challenging the Myth of Primitive Harmony*, New York, Free Press, 1992.
- Ferraro, Gary P., *Cultural Anthropology: An Applied Perspective*, Belmont, Wadsworth, 2001.  
福島真人「文化からシステムへ—人類学的実践についての観察」『社会人類学年報』24巻, pp.1-28, 1998年.  
船曳建夫(編)『文化人類学のすすめ』筑摩書房, 1998年.  
浜本満「差異のとらえかた—相対主義と普遍主義」青木保ほか(編)『岩波講座文化人類学 第12巻 思想化される周辺世界』岩波書店, pp.69-96, 1996年.
- Humphrey, Nicholas, *Consciousness Regained*, Oxford, Oxford University Press, 1984.
- Inda, Jonathan Xavier, and Renato Rosaldo, (eds.) *The Anthropology of Globalization: A Reader, Second Edition*, Oxford, Blackwell, 2007.
- Kahn, Joel, "Culture, Demise or Resurrection?" *Critique of Anthropology* 9(2), pp.5-25, 1989.
- Keesing, Roger M., "Theories of Culture," *Annual Review of Anthropology* 3, pp.73-97, 1974.
- Keesing, Roger M., and Andrew J. Strathern, *Cultural Anthropology: A Contemporary Perspective, Third Edition*, Fort Worth, Harcourt Brace College Publishers, 1998.
- Kroeber, Alfred L., and Clyde Kluckhohn, *Culture: A Critical Review of Concepts and Definitions, Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology*, Vol. XLVII, No.1, 1952.
- Kuper, Adam, "Culture, Identity, and the Project of a Cosmopolitan Anthropology," *Man*, New Series 29(3), pp.527-554, 1994.
- Kuper, Adam, *Culture: The Anthropologists' Account*, Cambridge MA, Harvard University Press, 1999.
- 桑山敬己「『現地』の人類学者—内外の日本研究を中心に」『民族学研究』61巻4号, pp.517-542, 1997年.  
エドモンド・リーチ『社会人類学案内』長島信弘訳, 岩波書店, 1991年.  
(Leach, Edmund, *Social Anthropology*, London, William Collins Sons & Co. Ltd, 1982.)
- Lewellen, Ted C., *The Anthropology of Globalization: Cultural Anthropology in the 21st Century*, Westport, Conn., Bergin & Garvey, 2002.
- Linnekin, Jocelyn, "Cultural Invention and the Dilemma of Authenticity," *American Anthropologist* 93(2), pp.446-449, 1991a.
- Linnekin, Jocelyn, "Text Bites and the R-World: The Politics of Representing Scholarship," *The Contemporary Pacific* 3(1), pp.172-177, 1991b.
- Linnekin, Jocelyn, "On the Theory and Politics of Cultural Construction," *Oceania* 62(4), pp.249-263, 1992.
- ジョージ・E・マーカス、マイケル・M・J・フィッシャー『文化批判としての人類学—人間科学における実験的試み』永渕康之訳, 紀伊國屋書店, 1989年.  
(Marcus, George E., and Michael M. J. Fischer, *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences*, Chicago, University of Chicago Press, 1986.)
- Markowitz, Fran, "Talking About Culture: Globalization, Human Rights and Anthropology," *Anthropological Theory* 4(3), pp.329-352, 2004.
- 松田素二「文化／人類学」杉島敬志(編)『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後』世界思想社, pp.123-151, 2001年.
- ドナルド・N・マクロスキー『レトリカル・エコノミクス—経済学のポストモダン』長尾史郎訳, ハーベスト社, 1992年.  
(McCloskey, Donald N., *The Rhetoric of Economics*, Westport, Praeger, 1985.)
- Murdock, George P., "Editorial," *Ethnology* 1, pp.1-4, 1962.
- リチャード・E・ニスベット『木を見る西洋人 森を見る東洋人—思考の違いはいかにして生まれるか』村本由紀子訳, ダイアモンド社, 2004年.  
(Nisbett, Richard E., *The Geography of Thought: How Asians and Westerners Think Differently...and Why*, New York, The Free Press, 2003.)



- 西川長夫『地球時代の民族＝文化理論一脱「国民文化」のために』新曜社, 1995年.
- 西川長夫『増補 国境の越え方—国民国家論序説』平凡社, 2001年.
- 小田亮『日常的抵抗論』  
<http://www2.ttcn.ne.jp/~oda.makoto/page005.html>, 2006年. (2008年3月8日最終確認)
- Ortner, Sherry, "The Geography of Thought: East Brain, West Brain," *New York Times* April 20, 2003.
- 太田好信『人類学と脱植民地化』岩波書店, 2003年.
- アルフレッド・ラドクリフ＝ブラウン『新版 未開社会における構造と機能』青柳まちこ訳, 新泉社, 2002年.  
(Radcliffe-Brown, Alfred R., *Structure and Function in Primitive Society, Essays and Addresses*, London, Cohen & West, 1952.)
- Sahlins, Marshall, "Goodbye to Tristes Tropes: Ethnography in the Context of Modern World," in Borofsky, Robert, (ed.) *Assessing Cultural Anthropology*, New York and St. Louis, McGraw-Hill, pp.377-395, 1994.
- Sahlins, Marshall, "Two or Three Things That I Know About Culture," *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 5(3), pp.399-421, 1999.
- 関本照夫「序論」関本照夫・船曳建夫(編)『国民文化が生まれるとき』リプロポート, pp.5-32, 1994年.
- 関本照夫「文化概念の用法と効果」青木保ほか(編)『岩波講座文化人類学 第13巻 文化という課題』岩波書店, pp.19-39, 1998年.
- 清水昭俊「日本の人類学—国際的位置と可能性」杉島敬志(編)『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後』世界思想社, pp.172-201, 2001年 a.
- 清水昭俊「日本における近代人類学の形成と発展」篠原徹(編)『近代日本の他者像と自画像』柏書房, pp.236-272, 2001年 b.
- Spencer, Jonathan, "Anthropology as a Kind of Writing," *Man, New Series* 24(1), pp.145-164, 1989.
- Spiro, Melford, "Cultural Relativism and the Future of Anthropology," *Cultural Anthropology* 1(3), pp.259-286, 1986.
- Stocking Jr., George W., *Race, Culture, and Evolution: Essays in the History of Anthropology*, Chicago, The University of Chicago Press, 1982(1968).
- Stolcke, Verena, "Talking Culture: New Boundaries, New Rhetorics of Exclusion in Europe," *Current Anthropology* 36(1), pp.1-24, 1995.
- 杉島敬志(編)『人類学的実践の再構築—ポストコロニアル転回以後』世界思想社, 2001年.
- 戴エイカ『多文化主義とディアスポラ』明石書店, 1999年.
- 竹沢尚一郎『人類学的思考の歴史』世界思想社, 2007年 a.
- 竹沢尚一郎「パリ／マルセイユ 2005.10-11」『国立民族学博物館研究報告』32巻1号, pp.1-62, 2007年 b.
- Thrift, Nigel, "Capitalism's Cultural Turn," in Ray, Larry J., and Andrew Sayer, (eds.) *Culture and Economy After the Cultural Turn*, London, Sage, pp.135-161, 1999.
- デイヴィッド・スロスビー『文化経済学入門—創造性の探究から都市再生まで』中谷武雄・後藤和子監訳, 日本経済新聞社, 2002年.  
(Throsby, David, *Economics and Culture*, Cambridge NY, Cambridge University Press, 2001.)
- テレンス・ターナー「人類学とマルチカルチュラリズム—マルチカルチュラリストが留意すべき人類学とはなにか?」柴山麻妃訳『現代思想』26巻7号, pp.157-175, 1998年.  
(Turner, Terence, "Anthropology and Multiculturalism: What is Anthropology that Multiculturalists Should be Mindful of It?" *Cultural Anthropology* 8(4), pp.411-429, 1993.)
- レイモンド・ウィリアムズ『完訳キーワード辞典』椎名美智ほか訳, 平凡社, 2002年.  
(Williams, Raymond, *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society, Revised Version*, London, Harper Collins, 1983.)
- Wolf, Eric, *Europe and the People Without History*, Berkeley, University of California Press, 1982.
- Wright, Susan, "The Politicization of 'Culture'," *Anthropology Today* 14(1), pp.7-15, 1998.
- Yengoyan, Alan A., "Theory in Anthropology: On the Demise of the Concept of Culture," *Comparative Studies in Society and History* 28(2), pp.368-374, 1986.
- 米山リサ『暴力・戦争・リドレス—多文化主義のポリティクス』岩波書店, 2003年.
- 吉見俊哉『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院, 2003年.